

～さっぽろ・消えた町かど～

朝倉賢(日本放送作家協会北海道支部長)

花見と祭りと円山線

もうすぐ、北海道神宮の春の例大祭、むかし風にいえば、“札幌まつり”がやってくる。六月十五日である。この神社は、明治のはじめ、開拓使が北海道の総鎮守として祭ったもの。だから祭礼の日は、全道の小中学校や官公庁、主な企業などは、国の祝祭日同様に休日になったものだった。そしてその翌日から学校の制服は冬服から夏服に替わった。女学生のセーラー服が紺色から白に、袖は長袖から半袖にと、キラキラと眩(まぶ)しかった記憶がよみがえる。

「北海道の夏は札幌祭りから始まる」それがいわば風物詩であり、町のきまりのようでもあった。

いま、北海道神宮に詣でるには、地下鉄東西線の円山公園駅から西へ歩いて公園に入るのが普通。道路(公道)は駅脇から公園まで百?bほどが袋小路で行き止まりだ。

この袋小路の部分に、かつて路面電車、円山線の終点があり、市電唯一の駅舎があった。改札も待合室もある本格的な駅舎で、木造タン屋根、下見板張り。田舎の駅の面影があった。線路が駅構内を通る仕組みではなく、線路に立ちはだかるように建てられていて、いかにも終点らしいたたずまいだった。

この駅は普段は無人のまま、近所の子供の遊び場や雨宿りの場所になっており、円山線に客が殺到するときだけ開業していた。正月の初詣で、五月の花見、六月の祭り。この時期はここに客があふれかえった。

電車は元々車掌が乗っていて、車内で切符を売ったり、改札のパンチを入れたりするのが当たり前だった。でも大混雑のシーズンは車内での仕事は無理。そこでこの駅で、切符販売用のテントまで張り、大きな目印のちょうちんを軒下にぶら下げたりと、交通局員が総出で客の整理に当たった。花見客が酔って車掌に酒を勧めたり乱暴をしかけたりするのを見かけることもあった。今では考えられないほどの賑わいが、この袋小路にはあったのだ。駅前広場には茶店が数軒あった。

円山線は昭和四十八年に撤去された。地下鉄東西線の起工式の年だった。この頃の運賃は乗り換えなしで二十五円だった。